

第66回 男鹿駅伝競走大会イベントレポート（第4回：4区）

【第4区】

レースは7区間中3区間を終えて折返し4区へ。

男鹿駅伝における4区は、分かり易く例えれば箱根駅伝のように花の2区と呼ばれるエース区間以外に、レースへの影響と注目度の高い山登りの5区があるように、この駅伝においても3区がエース区間ではあるものの、起伏の激しい4区のコース攻略がレースに与える影響は非常に大きく、レースを外さない安定感が求められる。

コースは、走り出しから断崖絶壁沿いの道をひたすら上り、上った分を下る、そしてまた上るというアップダウンを繰り返していく。1kmあたりのラップタイムは上りで3'40"程度、下りで2'50"くらいと、コース中で頻繁に走りの切替えが求められ、平坦部分がないため、息をつく暇がない。

当然、脚筋力が無いと半分も行かずに足が止まってしまう、後半に大幅なタイムロスとなる。



4区：9.1km（門前～賀茂）



門前のナマハケ立像（写真提供：男鹿なび）

3区レポートでも少し触れたが、4～6区に続く「おが潮風街道」は半島の西海岸を約25kmにわたり続く海岸道路で、晴れていれば高台から時折眼下に映る素晴らしい海の景色が楽しめる。



おが潮風街道の景色（写真提供：男鹿なび）

このような厳しい区間をきっちりと外さずに走れる選手は各チームの中でも限られるだろう。

だが、我がチームにはこの男がいる。今年も4区を走るのは2008年入社、10年目のベテラン石原 洸である。神奈川県出身で新エネ事業本部管理部生産管理課に在籍し、今は主にISの試作製品に関する生産管理業務を担当している。

学生時代は当社でも数少ない箱根駅伝経験者の逸材であり、入社1年目から自己ベスト記録を次々と更新、昨年からフルマラソンにも挑戦しており、北海道マラソン、さいたま国際マラソン、東京マラソンを走って、来年の東京マラソンでは既にエリートランナー枠での出場権を獲得している。

石原は元々ロード走の適性があり、距離の長い区間や起伏にとんだ区間、暑さ寒さへの対応など、厳しい条件にも臨機応変に対応できて減多なことでは外さない安定感が売りで、前田監督も絶対的な信頼を寄せていることから、この駅伝に出場することが決定した時点で、この区間を走ってもらうことは決まっていたと言えるだろう。



見えない学生チームを追う石原

後輩3人の汗が染みこんだタスキを受けて走り出した石原は、スタート時点で前をいく学生チームに1分8秒差と、3区同様に前後に競う相手のいない状態の一人旅であるが、自分が過去に出場した4回の全てでこの区間しか経験なく、その点では自分のためにあるようなコースであり、全容は隅々まで知り尽くしていることから、過去のレースを頭の中でなぞるように5度目のコースを難なく攻略していく。（若手が力をつけないと、いつになっても石原がこの区間しか走れない・・・）

決して万全の調子で当日を迎えたわけではないが、正確なラップタイムを刻み、淡々と自らの仕事を進めていくさまは、正に几帳面でマシメ、そして自分に厳しい職人の姿を彷彿とさせる。



起伏の激しいコースを攻略する石原

次第に霧が掛かって視界が悪くなっていく中、ジェットコースターのような起伏を変えらぬ涼しい顔で黙々と駆け抜けていく。このような状況においても走りは変わらず、5区に待つ職場の後輩である松谷のために、前をいく学生チームとの差をじわじわと確実に詰めていく。



濃霧の中での孤独な戦い

レース終盤、前をいく学生チームの監督車の掛け声が微かに聞こえ始め、その声が次第に大きくなってきたが、職人は走り出しから変わらぬ姿勢で黙々と自らの仕事に徹する。

石原はラスト 1km を切ると、それまでとは明らかに走りを変え、顔を歪めながら最後の一滴まで力を絞り出すようにスパートして 5 区の松谷にタスキを託した。

前をいく学生チームとの差を 41 秒詰めて 27 秒差とする力走、やはり自分の仕事に手を抜かないのが職人であり、外さない男は今年も当り前に 3 区間連続となる区間賞の走りを披露し、周囲の期待にクールに応えるのであった。



「松谷 頼んだぞ！！」

「任せて下さい！！」

【4 区成績】一般の部

距離 : 9.1km

順位 : 1/39 位 (大学を含む全体順位 : 4/53 位)

タイム : 28 分 02 秒 (目標タイム : 28 分 30 秒)

以 上

※ イベントレポート (第 5 回 : 5 区) へ続く